

○國民的美術機關

▲黒田清輝氏談▼

國民美術協會が略ぼ体を成したことは既に報じたが其働きは抑々どういふ事歟之に就て發起者の一人黒田清輝氏は語つて曰ふ

此會は日本畫、西洋畫、彫塑、建築、裝飾美術を網羅した公けの團體で私情を抛つて美術家共通の利益を計る國家的のものなのである、從來日本の藝術界は個人流派若しくは一部黨人の爲めに結集した團體が所在割據して蝸牛角上の争を事とし美術全体の利益に向つては未だ何等考へ及ぼして居らぬ様な有様で其前途否目前に大なる障碍の横はれるを解決し能はぬのである、こゝに於てか我々は昨年我が西洋畫家大懇親會の席上で起つた相談を進めて國民美術協會なるものを發起し假にその定款を作ると云ふ場合にまで渉んだのだが、こゝに最も注意を要するのは此會が黒田一人又は西洋畫の利益の爲めに企てられたものでない、即ち毫末の野心なくして國家美術の爲めに起したものと云ふ事である、西洋畫家の會で端緒が開けたから我々が假りに率先して唱道したに過ぎぬので其日本畫、彫塑、建築裝飾、美術の諸君と共に起つ能はざりしは未だそこ迄渉んで居らぬからである、但し我々は一面に便利ある他の藝術家へは着々交渉しつゝあるのが、万一前述の如き誤解から感情を害する様なことありては斯る大結合の纏まる機會は再びあるまいとまで心痛する、乃で國民美術協會の仕事は澤山あるが第一に必要を感じるのは日本の美術を代表して内外に活動する事で、少しくその例を擧げれば日本で美術家唯一の出世

場所と見做される文部省美術展覽會改善の事で、年々歳々その審鑑査に議論の喧ましいのは御承知の通りだが、之を改善するには諸般の美術を網羅した團體が熟議を凝らして公平な委員を出すとか、審鑑査の大体の標準を定めるとかせねばなるまい、次に内國藝術家が憧憬れ居るロダンの作品展覽會の如きもロダンと我國藝術家との希望は互に一致してゐながら保険料一萬圓許りの事から大使と外務省との相談が破れたと云ふ事もある、建築裝飾と云ふことも其名は立派に唱へられてるが建築家と美術家の連絡が充分ならざる爲めに未だ初めより共同一致して計畫を立てると云ふに至らず、随つて世界に誇るべき立派なものが出来ぬと云ふ哀れな有様になつてゐる等は畢竟日本に代表的美術機關の缺けてるのに歸因するので、我々美術國民協會の成立を望んで已まざる所以はここに存するのである、此他常設美術館設置の事、藝術家養成及び救濟の事等算へ來ればいろいろあつて一々は言ひ盡せぬ只日本の美術が世界の進歩に後れて終になすなきに至らん事を憂ふると同時にその健全なる發展を促さんと欲して此協會を守り立てることになつたのである云々世の美術家殊に新進有爲の諸氏は奮つて此新しい美術機關の運用に努力するがよろしい

〔中央新聞（夕刊）大正二年四月一日〕

國民美術協會は、大正元年二月、第六回文展洋画部の懇親会の席上で設立が發議され、翌二年三月三日の創立總會において黒田を會頭として発足した美術団体である。創立總會に先立つ二月二五日の会合で定められた定款によれば、その事業内容は「一、美術展覽會の開設 二、美術家に対する補助、寄附、賞与 三、必要なる場合に於て本會々員の救助 四、前各号の外日本に於ける美術の進歩發展及保護奨励に關し必要の事業」（『美術新報』二二四大正二年二月）というものであつた。

本文献中の「ロダンの作品展覧会」は、オーギュスト・ロダンと文芸雑誌『白樺』同人との文通による交流をきっかけに持ちあがったデッサン展のことである。この企画は明治四五年六月一八日、パリ滞在中で交渉を託された与謝野寛(鉄幹)・晶子夫妻のロダン訪問を機に『白樺』同人の手を離れ、黒田へと委ねられるようになるが、その送料・保険料をめぐって難航せざるを得なかった。黒田を会頭とする国民美術協会でもこの問題に取り組み、大正三年四月の大正博覧会と同時に帝室博物館で開催することを決定するも、結局その天覧を希望するロダンの意向とも折り合わず、デッサン展は不開催に終ってしまう。

国民美術協会については、『近代日本 アート・カタログ・コレクション 五六 国民美術協会』(ゆまに書房平成一五年五月)、山梨絵美子「黒田清輝と国民美術協会」(東京文化財研究所編『大正期美術展覧会の研究』中央公論美術出版平成一七年五月)を参照。ロダンのデッサン展については、泰井良「不開催に終わったロダン・デッサン展をめぐって——パリ・ロダン美術館所蔵の書簡を中心に」(静岡県立美術館『ロダンの水彩画とデッサン展』図録平成二年一〇月)を参照。